

第8回 NBRP コムギ（第2期）運営委員会 議事録

日時：平成23年5月30日（月）13:00～17:00

場所：京都大学吉田キャンパス北部構内 農学・生命科学研究棟 農学専攻会議室 116

出席者：13人

コムギ運営委員会 運営委員

辻本、遠藤、河原、荻原、山崎、中村、那須田

NBRP コムギ 実施担当者

川浦、岸井

コムギ小委員会委員

田中、加藤、森、村井（み）

議長：辻本、書記：村井（み）

確認事項

1. 第7回 運営委員会議事録確認（第8回資料1）
2. 組織およびメールアドレス確認（第8回資料2）

辻本メールアドレス変更 “muses” →変更後 “alre”

NBRP 事務局 中島紫→小島美智代

文部科学省ライフサイエンス課 三上恵理子→細野、都島、松村

小委員会委員 西田（岡山大）が記載漏れ。奥本（京都大）が新加入。岩永（作物研）はJIRCASに異動。

報告事項

1. 22年度 事業報告

1-1. 京大 物集女担当 種子（第8回資料3）（河原） 荻原から訂正：資料中2. 業務担当者 横浜市立大学 坂智宏→坂智広（誤記修正）

1-2. 京大 遺伝担当 種子（那須田） 資料訂正：2010年3月31日まで→2011年3月31日まで（誤記修正）

（辻本）配布にかかる期間は。⇒（那須田）国外の長い場合で6カ月。

1-3. 木原生研 遺伝資源担当 種子（第8回資料4）（岸井） 資料訂正：笹沼恒男准教授→笹沼恒男准教授（誤記修正）

(那須田) 穂発芽種子のために不発芽だった系統はひとつ前の代の種子に戻れば発芽するのではないか。⇒(河原) それは可能である。

(辻本) 平成 22 年度増殖系統で、増殖に失敗したものは。⇒(河原) ある程度まとまったら再増殖する。

(辻本) 他に増殖する上での問題は。⇒(岸井) うどんこ病が出る。⇒(辻本) 石灰硫黄合剤がよい。

1-4. 木原生研 ゲノム科学担当 DNA ソース (第 8 回資料追加ページ) (荻原) 2)-(3) 公開の仕方について、よりユーザーフレンドリーになるよう検討している。 3) DNA クローンの送付件数は有償化されて激減した。徴収のやり取りが上手くいかず滞っている面がある。

1-5. 京大 遺伝担当 DNA マーカー (第 8 回資料 5) (那須田)

(山崎) データ公開の仕方でユーザーから要望はあるか。⇒(那須田・村井(み)) 特にない。推奨 210 マーカーによるパネル外の系統のデータも公開したいが。⇒(山崎) 同じ方法で良いか、データを比較できるようにするかなど、後日また相談。

1-6. ゲノム情報整備プログラム (資料なし) (那須田) 22 年度は岡山大佐藤さんと提出したが不採択。今年度は那須田から、京都大学・岩手生工研センター吉田さん・滋賀県立大清水さんで提出。採否はいまだ不明。

(山崎) バックアップ事業が優先されるので今年度整備プログラムが通るのかは兼ね合い。

2. リソース配布に係る実費徴収システムに関する報告

2-1. 京大 (資料なし) (那須田) 系統当たりの料金は据え置き、再計算の結果、事務手数料を上げた。国内 620 円を 880 円に変更。外国は 300g まで 2900 円だったものを 4900 円に、500g まで 3200 円だったものを 5200 円に変更。外国への配布の事務手数料の値上げは検疫所への出張旅費による。

(辻本) 外国の場合、請求額と入金額がぴったり合わなければ何回も請求するとのことだが、京大ではどのようにしているのか。⇒(那須田) 銀行の口座に入金される前にその予定金額を大学に通知し、合っている場合にだけ銀行が口座への入金を許可するので合うようになっている。現状では諸々の問題があるのでクレジットが利用できる京都工繊大の山本先生が設立した NPO 法人のシステムを利用するように進めている。送金業務を委託するので価格は上がると思われる。⇒(山崎) 銀行口座も併用するのか。⇒銀行振り込みは廃止する予定 (那須田)。⇒(山崎) いつ頃、移行か。⇒(那須田) 未定。⇒(荻原) このシステムについて補足説明。⇒(山崎) センチュウが使っていて、メダカも使おうと動いて

いる。みんなが使えば利用料は安くなる。

(荻原) 京大の事務手数料もあるのか。⇒(那須田) ある。

(辻本) このシステムは国内国外ともか。⇒(那須田) そうである。このシステムの利便は、ユーザーが送金しやすい点と、金額が合っているか確認できていなくても送金があった時点で配布手続きに移れる点。

2-2. 横浜市立大学(資料なし)(川浦) 請求があつてから配布にかかる時間は国内で約 1 カ月、外国の場合はこれまでオーストラリア、カナダ、アメリカから請求があつたが、請求書を発行してから入金確認ができず配布できていない。

(辻本) どのような形で配布しているか。⇒(川浦) プラスミド。横浜市立大学の研究推進センターが徴収の窓口になっているが送金が難しい。

3. KOMUGI データベースワーキング報告(第 8 回資料 8) (那須田) 議題 6 研究成果とリソースのリンクについて 今後 **Breeding Science** に系統番号を入れてもらえることになった。

(山崎) 詳細情報に成果を載せていきたいが、一つの論文に 300 とか 600 の系統が使われているときはどう扱うか。⇒(那須田・辻本) 全て系統番号が書いてある方が良い。

(山崎) こちらでも情報収集をしている。フルテキストで検索しなければならない。継続的にお願いしていくのが一番。

(辻本) **Breeding Science** の中ではコムギに関わらず系統番号を明示する方向で進めている。育成段階の種子はどうするかなど検討中のものもある。**NBRP** の番号の統一の話もある。

(山崎) 古いリソースに新しい番号を付けることは理研などで抵抗があつた。

4. 長期保存、バックアップ体制に関する報告(第 8 回資料 4) (岸井) 真空密封が難しいのでチャンバー式システム・アルミ袋に変更することを検討中。

(那須田補足) 長期保存バックアップ体制に対するワーキングを委員会で承認するようにお願いしている。メンバーは岸井、笹沼、松岡、河原、那須田の 5 名。⇒(辻本) 承認しましょう(全会一致)。

(辻本) 袋内に空気が入っているのではなく中から発生しているのでは。⇒(河原) フィルムの材質によって入るものがある。

(岸井) シリカゲルの形状に問題があるかも。丸いものを使う。

(河原) 物集女では 1983 年にチャンバー式を導入、約 20 年後、播種してみて発芽しなかったが、元の種子が悪かった可能性がある。

(那須田) シリカゲルが袋に傷を付けるので小袋入りのシリカゲルを使うとよいかも。

(荻原) 何度で何年もつのか。⇒(河原) 5℃、シリカゲルで 30 年ぐらいもつ。計算式が

ある。

(辻本) 水分を抜き過ぎてもよくない。長期保存では宇宙線などによる突然変異や染色体切断などで DNA が損傷し修復されないので傷む。

(荻原) 大腸菌などでは -80°C や液体窒素に入れておけば永久に保存できるとされているが、コムギではできないのか。⇒(河原) コムギも液体窒素で保存しているところはあると思う。半永久的に保存できるだろう。液体窒素が手に入るところでは電気を使うよりコストが低い。

(辻本) スバルパールの「ノアの方舟計画」というのがある。⇒(那須田) ここの計画では発芽率の低下があるので 20 年で廃棄するとのこと。

(加藤) 岡山大学では -15°C シリカゲルで 20 年はもつ。

(那須田) 体制としては木原と京都で持つ。両方の機関で長期保存用を持ち、加えて配布用の計 3 セット持つ。

5. 学会等での活動報告 (資料なし) (那須田)

(辻本) 分子生物学会での反応は。⇒(那須田) あまり反応はない。出さないよりは良いだろう。全体を網羅する展示ではなく、フォーカスを当てた展示の仕方を。展示物の協力を呼びかけた。

(山崎) ウェブの e-book 「コムギの話」をきれいな小さい体裁にして冊子にして配る。

(辻本) 「コムギの話」のアクセス数はどうか。⇒(山崎) 全体でしか集計できていない。学生は見ているのではないか。

(辻本) 学会用の展示物を用意したい。どこで誰がやるのか。⇒(川浦) 穂の標本は見込んで毎年作っている。

(河原) 博物館の展示用に大きな額に入れたものがいくつかあるが、大き過ぎて持っていけない。⇒(那須田) ブースに置ける大きさであることが重要。もしくはモニターで映せるもの。

(辻本) どこに何があるか分かっていたら便利。例えば矮性と非矮性とが並べてある標本など。1 回作成すればずっと使える。

(中村) 市販されているアクリル樹脂で包埋する。角は自分で枠を作る。⇒(辻本) そういうことを今期は無理でも来期にでも仕事としてやったらいい。

(那須田) 今年度の予定としては 9 月 20 日の遺伝学会 (ブースとシンポジウム)、分子生物学会、国際分子・植物・微生物相互作用学会 (XV IS-MPMI) は今年度の予定だったが来年度に延期。

6. 関連事項報告 (震災の影響等: 第 8 回資料 9)

震災の影響 (那須田) コムギ関係で震災の影響があってリソースの保存に困っていると

ころはあるか。⇒(中村) 種子保存の低温庫は停止したが問題はない範囲であった。(荻原) 非常電源が点検中で途中まで入らず-80℃の設定のところが一20℃まで上がったがそれほど問題はなかった。冷蔵庫は問題なかった。

NBRP 情報センター(第8回資料 p.24) (山崎) 資料の通り。

-----休憩-----

審議事項

1. 平成 23 年度 事業実施計画

1-1. 種子系統(第8回資料 3, 4)(河原)

1-2. DNA リソース(第8回資料 追加ページ)(荻原)

(那須田) 2(3) TAC クローンはリクエストのあったものだけを増幅しているのか。また、生きているのか。⇒(荻原) リクエストのあったもののみ。死んだものもあるが全滅ではない。

1-3. DNA マーカー(第8回資料 5)(那須田)目標は第3期以降でジェノタイピングを進めつつ表現型データも取れるパイロット実験とすること。

(辻本) 形質を取るというのは。⇒(那須田) 岸井さんと相談し木原生研で取っている形質を参考にデータを取っている。表現型データとジェノタイプを繋いでいきたい。

(山崎) 写真は。⇒(那須田) 交配の時期になるとほとんど無理だった。穂の写真は今後撮影できる。芽生えの写真はある。⇒(辻本) 穂の写真はスキャナーを使うとよい。⇒(加藤) USDA では穂と穀粒の写真のみ。⇒(那須田) NBRP のオオムギも穂と穀粒の写真のみ。系統の選び方は物集女のリストから地域ごとのコレクションの量に比例するように取っている、物集女のコアコレクションといえる。

1-4. ゲノム情報等整備プログラム(那須田)申請中。

2. KOMUGI データベースワーキング報告(第8回資料 8)

(松岡 代理: 那須田) 今後も年 1 回開催しデータベースをどうしていくか検討し、実行していく。7月から11月に遺伝研で開催予定。山崎先生が統括されている NBRP 全体のデータベースの集まりの中で、コムギのデータベースワーキングのケースを紹介していた。リソースの中でユーザー側が加わってデータベースを良くしていく検討をしている点の特徴。

(山崎) この活動は NBRP の他の生物種の方に波及効果があり、トマトでもデータベースワーキングが発足し、カイコはワーキングまで規模は大きくないが話し合いの機会を持つ

ことを検討するようになった。情報センターだけで公開するだけでなく、さらにどのように発展させるかということになると中の方に議論していただかないとなかなか進まない。外部からもいろいろな意見が聞こえるようになるとうい。

3. 第3期に向けて（組織、体制、業務内容等）および

4. 運営委員会委員の構成と実施者の関係についての見直し（第8回資料12頁）

（那須田）統括のシートを文科省に提出した。遠藤とヒアリングを受ける予定。文科省は仕分けに入っている模様。先進的、発展途上、維持型のリソースに分けていくだろう。

（山崎）少額でも0にはしたくないが文科省としては何も削らないわけにいかない。成果が厳しく見られるだろう。

（辻本）神戸での会議で、日本に植物リソースがある意義を考えていこうとなった。⇒（那須田）方向性を出すのではなく結びつきを強めようという話だった。

（辻本）植物リソースではシロイヌナズナが上にあってその下にその他のリソースがある構図。⇒（那須田）シロイヌナズナのリソースをどう使うかが強調された。

（辻本）コムギとしては、作物としての重要性のみならずこのリソースによって遺伝学が発展するという、他の作物とは違う特徴を主張していかなければならない。

（山崎）特徴を表すキーワードを作ったらどうか。⇒（那須田）“染色体工学”、“倍数性”など。ユーザーコミュニティの発展性が大事。中核機関だけでなく、ユーザーコミュニティが一定規模あり、リソースを使っている実績を示すことが大事。⇒（辻本）コミュニティとはこの会合の意味か外国まで含むユーザー一般も含むか。⇒（那須田）階層的になっていて、まずは国内のコムギ研究者。⇒（辻本）それを統括していて、情報交換できる状態ということか。⇒（那須田）特に2期については農水省関係の方もたくさん入っていただき相互に利用しあう関係はできてきている。⇒（辻本）課金するようになった点では一般ユーザーに広がる妨げ。⇒（那須田）財務省的には有償でも需要があるようなリソースであるべきという考えでは。

（荻原）作物でありながらも文科省の管轄であるから実験材料としての価値を出すようにということはあるのか。⇒（山崎）ある。イネでは育種と基礎研究とで農水省と文科省の住み分けをしていたが、最近は育種に野生イネを使うようになってきてオーバーラップするようになってきた。

（辻本）簡単に育種に使えないものをなぜ維持する必要があるのか説明が必要で、それは“倍数性進化”に尽きるのではないか。

（荻原）リソースとそれを支えるコミュニティがあるという現状について評価委員会側の評価はどうか。⇒（那須田）体制は評価されているが実績（論文）が問題。中間評価は良かった。

(辻本) オオムギと比較した場合、コムギは研究者人口が多くコンソーシアムもしっかりしているだろうと思われる半面、配布量がコムギは少ないのでは。⇒(那須田) 配布量はコムギの方が多いだろう。

(那須田) コミュニティーをあるべき姿にもっていくことは難しいが、リソースを利用されやすいように工夫することはできる。

(山崎) コムギ以外のイネ科のユーザーがコムギのリソースを使うことはないのか。⇒(中村) コムギの価値は倍数性にあるので、他のユーザーはコムギを使わないだろう。ところが最近ではコムギであっても世界中が有用遺伝子を取る研究に集中してきているので、倍数性であるリソースの価値が生かされず利用数が上がらない一因になっているのではないかと。価値があることがわかればリソースの利用は上がる。リソースとしての価値と研究現場で現在必要とされている材料との間に距離がある。リソースを扱っている側がリソースの価値をどう見せられるかが大事。

(那須田) 去年、リソースを開発するとしたら何を開発するかという調査があった(第 8 回資料 26 頁参照)。6 倍体コムギの成立過程の再現系を用いて野生種の遺伝子を取り込んでいくことと、6 倍体コムギ在来系統を利用しやすくすることが今後必要であろうと考えている。遺伝資源全体で、遺伝子型と表現型との関係を見直していくことが求められている中で、突然変異系を使う手法もあるが、既にある変異を使う手法もある。

(辻本) コムギリソースは長い探索の歴史があり、今では現地では絶滅したものもあるなど、多様なリソースが既に手元にあることに価値がある。多様性の重要性をどう理解してもらうか。⇒(荻原) マウスやシロイヌナズナでも野生種の多様性に目を向けつつあるように、多様性の重要性は理解されるようになってきているので、中心品種とそれを取り巻く野生種があるというリソースのモデルとしてコムギが旗を振ってもいいのではないかと。

(河原) 野生種の *Ae. tauschii* プロジェクトが始まり、来年度にはデータと種子が用意できるので、今後、利用が見込める。

(那須田) 以上は増額の場合の議論。減額の場合の計画も用意したい。今ある種子の保存をし、配布していく体制は確保する。

(辻本) 生きものである種子の維持が中心。予算規模により、さらに付帯する DNA、クローン、マーカーなども確保する。コムギのリソースの重要性は多様性と倍数性。(全会一致で確認した)

(荻原) 倍数性は一般的であり、イネもオオムギも倍数性があり、リソースとして収集している。コムギは倍数化のモデルシステムとして材料や知識を整備している点が他にない利点。

(辻本) 植物全体では倍数性進化は一般的であるにも関わらず、食用としている種には 2 倍体が多い中、パンコムギは 6 倍体で、近縁種のさまざまな倍数性のコレクションも充実している。

(荻原) さらにコムギにはナチュラルイベントとしての倍数体と人工的な倍数体とがある。

両方があることをうまく見せられるとよい。実験系統として木原先生が何十年も前に作った人工倍数体があることもコムギリソースの価値の理解促進に使える。

(辻本) 雑誌「遺伝」での NBRP の記事の中でコムギの利点を書いたので参考にできる。倍数性であるからこそ異数体ができる。染色体工学ができるのはコムギの特徴。

(荻原) 異種の染色体添加系統があるように染色体工学ができるセットが揃っているし、マウスで近年開発されているコンソミック系統はコムギでは何十年も前から行われてきた。染色体工学の材料としてアピールすればコムギ外のユーザーにも関心を持ってもらえるのではないか。

(山崎) 置換系統の模式図でわかりやすいものを作れば他の分野の人も理解でき関心を持つはず。

(辻本) 模式図にその系統が確立した年も書いてはどうか。

(中村) 多くの研究者が実際に置換系統を使って遺伝解析をしている。

(那須田) 育種に使われているという実例が増えれば置換系統を保有している価値をアピールできる。

(辻本) グルテンは粉に水を入れるだけで粘弾性が出る特殊な化学物質であり、コムギでしか取れない。一般の人が口にする作物であるコムギの重要でわかりやすい遺伝学として、グルテンの遺伝学をやっていることも、一般へのアピールになる。

(辻本) 第 3 期に向けて組織のイメージはどう描くか。最も小規模な場合は物集女だけということか。⇒(那須田) 大講座制なので物集女と遺伝は同一講座内別分野。⇒(辻本) では最も小規模な場合は京都大学農学研究科資源植物科学講座での種子の維持を確保する。

(辻本) さらに規模を大きくできる場合、木原生研の体制、要望について。⇒(荻原) 体制は植物遺伝資源科学部門(教授・坂、助教・岸井)を 植物ゲノム科学部門(教授・荻原、助教・川浦)がサポートしている。研究所としては当分、廃止されることはないだろう。

(辻本) バックアップのこともあり、東西にあるので、これまで通り横浜と京都とで維持することを委員会として要望する。

(荻原) ゲノム情報を整理し利用しやすい形にしたい。⇒(山崎) かずさ DNA 研究所の田畑先生が 3 年間で統合データベースとして植物のリソースのシーケンスを中心としたデータ情報の統合を考えている。

(辻本) 今後、ゲノム情報はそのような別のプロジェクトで走るかもしれないが、遺伝資源と解離しないようにする。

(那須田) 京大の資源植物科学講座でコムギの維持・研究を続けるべきか。

(辻本) 農学部であることやこれまでの伝統を考慮すれば、京大の資源植物科学講座で、シロイヌナズナでなくコムギを植物遺伝学の材料として維持・研究を続けてほしいと委員会として要望する。委員会は、資源植物科学講座では NBRP の中核としてコムギを中心と

した遺伝科学を進めることを要望している。また、木原生研においてもサブ中核として続けることを望んでいる。

(那須田) 第3期の途中で遠藤、河原、荻原が退職。第3期発足時は遠藤が代表者となるが途中で交代。⇒(辻本) コムギではデータベースワーキンググループで若手が活発に活動しており、世代交代の準備は万全である。

4. 運営委員会委員の構成と実施者の関係についての見直し(第8回資料12頁)

(那須田) 常脇先生には勇退していただく。データベースワーキンググループのメンバーである松岡、宅見、農水ジーンバンクの河瀬を運営委員に希望。

(辻本) 運営委員会、小委員会、データベースワーキングの位置づけは。

(山崎) 昔は運営委員会の半分は携わっていない人だった。

(辻本) 運営委員会はユーザーの会議なので、半分は外部の人、半分は実施者であるのが良いか。運営委員会は年長者で、下に若手の実行部隊がある体制がいいのか。運営委員で実際には動いていない人は外して若手で固めるのがいいのか。

(那須田) 実施者が運営委員会に入っていると独立性がない。

(辻本) 運営委員長には事務経費が付かずボランティアになるので、現在、委員会資料は実施者でもある京大で作成してもらっている。

(山崎) ほかの委員会ではコミュニティ外の顔見知りでない人が増えてきている。委員会には委員でなくても実施者は出席し、そのような人には旅費を出さなければならない。

(那須田) 実施者を全て落とすのも手。

(辻本) 実施者を委員から落として、委員会には出席してもらうのがフェアだろう。(山崎) 少し外部の人が委員に入るとよい。

(荻原) 小委員会で実施担当者とともに計画を作り、運営委員会で議論する。

(辻本) 規約の取り決めをするなら、まず、委員長(1号委員)、リソースのユーザー研究者の代表者数名(2号委員)、コムギ外 NBRP 関係者2名ぐらい、コムギを利用した企業代表者か。⇒(加藤) コムギの場合、製粉関係者と研究業界に距離がある。

(山崎) 実施者を全て落とさなくても。⇒(辻本) 代表者と事務取りまとめの者は運営委員に入れてもよいだろう。

運営委員選考の基準の規約として、運営委員会の構成は、委員長、リソースのユーザー研究者の代表者数名、NBRP のコムギ以外の生物種・情報関係者約2名、代表者と事務取りまとめの者とし、リソースのユーザー研究者の代表者数名には、リソースを使っていて精力的に研究されている人を選ぶという基準で選考する。(全会承認)

(山崎) 任期はあるのか。⇒(辻本) プロジェクトが5年なので総入れ替え。

(河原) 小委員会に山口大・丹野を加える。(承認)

(荻原) 岐阜大に付いていた異数体維持のための費用の現状は？⇒(那須田) 京大に付いている。⇒(河原) 小委員会委員の岐阜大・山根はコムギの研究を行っている(系統維持費とは直接関係ない)。

(辻本) 小委員会委員にはコムギの色々な情報が行くのでコムギに携わっている人には誰でも入ってもらえば良い。⇒(那須田) 近中四の池田さんを推薦。(承認を得る)

(辻本) 大阪府大・森川さんについて第 1 期ではエンバクも入っていたのでメンバーに入っているし系統もあるが、現在は活動されていない。系統をどうするか打診し、依頼されたら預からなければならないが辛い。東京農大・藤垣さんもあまり活動されていない。

(辻本) 第 3 期の申請書は今の運営委員会が作るのか、世代交代の核となる人をここで決めて書くのか。⇒(荻原) 中核機関が書くのが普通。中核機関が書くときには新しい人の意見を入れたらよい。

(那須田) 定期的な書類書きは中核機関で作成しないと仕方がないが、中核機関でなくてもできる展示などの仕事を切り離せると楽。

(辻本) 運営委員会で役割分担を決める(展示など)。京都で役割を振り分ける。任せたらよい。名簿に**担当と明記する。

(那須田) オオムギとの関係をどうするか。⇒(辻本) オオムギとコムギは植物も違うし倍数性も違うが、ゲノムは似ている。連携はとるが目的が違う。一緒にはできない。

(荻原) 統合されそうになるときに、分かれていることの正当性を説明できること。

(辻本) 倉敷は植物遺伝資源ストレス科学研究の共同研究拠点になったので強み。

(荻原) オオムギとコムギを統合して、ブランチとしてオオムギ・コムギがあるのではなぜだめなのかが要る。財務省は一つの委員会で、ブランチとして他の植物をぶら下げたいのでは。コムギが独立した組織であるべき理由としては、染色体をチェックしなければならないことがある。

(那須田) ブランチになると自由度が下がる。

(荻原) 独自性が失われかねない。

(那須田) 京大の中にバーチャルでもコムギ遺伝資源センターを作る。

コムギ運営委員会では、コムギのリソース事業をしっかりと進めるために、京大の資源植物科学講座をそのリソースに特化するような形で名称も含めて発展的に組織替えをするように要望する(全会一致)。

(辻本) 第 3 期に向けての確認として、生ものであるリソースを中心として、付加価値を付けるフェノタイピングの部分も含める。

(那須田) バックアップの追加配分 500 万円の用途について。

(河原) 優先順位、野生種について連絡。

(那須田) DNA クローンは一部京都で預かる。⇒ (川浦) 2 セットあるものとないものがある。完全長と EST があって大事なものは完全長。完全長は 2 セットになっていなくて 384 のプレートで 289 プレート。縦型の冷凍庫の 1 段で十分。

運営委員会終了

コムギ小委員会

1. 第 12 回 国際コムギ遺伝学シンポジウム

(荻原) 役割を決めた。2013 年 9 月 8 日~14 日 パシフィコもまだ据え置く。8 月で決定。会場が決定してから HP を立ち上げる。

代行会社に依頼する部分を検討。プログラムをどうするか。Plenary のスピーカーは早く抑えなければならない。費用を誰がもつか。Proceedings、Abstract は紙ベースにしない。USB で渡す案がある。

(那須田) ダウンロード、オンデマンドプリンティングもある。
プログラム委員会での検討状況 (追加資料参照) (加藤) 全体の Plenary (オープニングセッション) を大御所の誰かに話してもらう。

OECD に予算の枠がある。

(辻本) conference

2. eWIS

笹沼メール那須田代読。通常通り 3 月 1 日に 111 号を発行。112 号の編集から鳥取大・田中先生、岡山大・西田先生に編集委員に加わっていただいた。東日本大震災に関して通常通り業務を行っているとのアナウンスを HP に出した。7 月中旬締め切りの年次報告をお願い。論文数が少ない。

3. ムギ類研究会

(荻原) 例年通り 11 月下旬から 12 月上旬に、今年は横浜で開催する予定。

(那須田) シロイヌナズナで生理学をやっていた広島大の古本さんが最近コムギで高温にさらすとコムギが徒長する生理学について始めようとしているのでチャンスを与えてほしい。

(辻本) そのようないつもは聴かない話を勉強したい。

(荻原) 新しい面白そうな人をオーラルに選んでやってもらいたい。

-----以上-----